

杉よ！ 眼の男よ！

富岡 誠

「杉よ！ 眼の男よ！」と

おれは今、骸骨の前にたつて呼びかける。

彼は黙ってる。

彼はおれを見てニヤリ、ニタリと苦笑している。

太い白眼の底一ぱいに、黒い熱涙をただよわして時々、海光のキラメキを放っておれの顔を射る。

「なんだか長生きの出来そうにない輪かくの顔だなあ」

「そりや——君——君だつて——そう見えるぜ」

「それで結構、三十までは生きたくないんだから」

「そんなら——僕は——僕は君より、もう長生きしてるじゃないか、ヒッ、ヒッ、ヒッ」

ニヤリ、ニタリ、ニヤリと、白眼がにらむ。

「しまった！ やられた！」

逃げようと考えてうつむいたが

「なにくそっ」

今一度見上ぐれば

これはまた、食いつきたいほど

あわれをしのばせ

ほほえまねど、ひきつけてはなさぬ

彼の眼の底の力。

慈愛の眼、情熱の眼

沈毅の眼、果断の眼

すべてが闘争の神器に盛られた

信念の眼

眼だ！ 光明だ！

固い信念の結晶だ。

強い放射線の輝きだ。

無論、烈しい熱がともない湧く。

おれは眼光をおそれ、うやまい、尊ぶ。

彼に

イロができたと聞くごとに

「またか！ アノ眼にまいったな」

女の魂をつかむ眼

より以上に男を迷わした眼の持主

「杉よ！ 眼の男よ！」

彼の眼光は太陽だ。

暖かくいつくしみて花を咲かす春の光

燃え焦がしただらす夏の輝き

のがれて汚れをすすぐ秋の照り

彼の眼は

太陽だった

遊星はために吸いつけられた。

日本一の眼

世界にまれな眼！

かれの肉体が最後の一线に臨んだ刹那にも

彼はつぶらなかつた。

彼の死には「瞑目」がない。

太陽だもの

永劫に眠らなう。

ゆく者は、あの通りだ——

そして

人間が人間を裁断する。

それは

自然に叛逆することだ。

おそろしい物すごいことだ。

さびしい悲しいおもいだ。

何が生まれるかしら？

凄愴と哀愁とは隣人ではない。

煩悶が、

その純真な処女性を

いろいろの強権のためにじゅうりんされてはらみ

それでも月満ちてか、何に知らずに

にごったこの世に飛び出して来た

父無し双生児だ。

孤独の皿に盛られた

黒光りする血精に招かれて
若人への血はたぎる、たぎる。
醜態すれば何物をも破る。

死を賭して行為に出会えば
おれは、いつでも
無条件に、頭を下げる。

親友、平公高尾はやられ
畏友、武郎有島はみずから去る
知己、先輩の

「杉を失なり——ああ！」

「おれ」は生きています。

——やる？

——やられる？

——自殺する？

自殺するために生れて来たのか。
やられるために生きているのか。
病死する前に ——
やられる先手に ——

瞬間の自由！
刹那の歡喜！
それこそ黒い微笑
二足の獣の誇り
生のたまもの。

「杉よ！ 眼の男！」

更生の靈よ！」

大地は黒く汝のために香る。

——一九二三・一一・一〇——

杉よ！ 眼の男よ！ によせて 三浦精一

これは大杉にささげた中浜の詩である。大杉が憲兵隊に殺されたのは一九二三年（大正十二年）九月十六日、関東大震災で東京の大半は焼け野原となり、朝鮮人襲撃のデマが流されて戒厳下におかれていた。南葛労働組合の九名は九月六日、亀戸警察で軍の手によって殺され、主義者と呼ばれる者は皆検挙されるといった恐ろしい混乱の中にあった。

あるブルジョアの知人は語った、あの時朝鮮人騒ぎが起って僕等は本当に助かったのだ。そうでなかったら、

焼けなかった僕等の所は襲撃されてたかも知れないと。銀行家の安田善次郎が殺されたのも、この時だったと思う。警察や軍隊が治安を守るために武装出動するのは、こうしたことのためだろうし、日頃虐待されている無力な朝鮮人をデマの犠牲にしなければ武装戒厳の口実は出

来ず、民衆が立ち上った後ではどんなことになるか分らないのだ。しかもこの民衆も朝鮮人虐待の共犯者で、朝鮮人襲撃と言えば、それを否定できない弱味を持っている。巧妙に仕組まれたデマだ。そして効果的だった。民衆は自警団をつくった。軍や警察の思う通りに動いた。

こんな中で大杉は殺された。僕のいた本郷では町の商人も勤め人も代り合って縁台に腰かけて駄弁る自警組織で、お互い何かあったらというだけのこと何の命令系統もない集団で仲よくやっていた。その中のある人が「大杉といっても何も危険人物でもなく、地震の後には町内の人たちと一緒に、こんな風に協力していたそうだと」言っていた。だが一步通りになると、あちらこちらに検問所があって、軍や警官と一緒に、鉢巻したり、腕章をつけて、日本刀や竹槍を持った自警団員が物々しく訊問していた。

日が経つと、僕たちのグループも何か重荷になってきた。そこに他の町内との統合の話が出た。すると「私た

ちの自衛組織」という小集団が一つの命令系統に統合されることになる。急に出て来たのは、小集団への愛着と幹部になる顔役への反感だった。スタモンの末、結局は統合された。

大杉とは関係のない、こんなことを書いたのは、大杉も、他の無政府主義者たちも、いつも口にする「民衆」というものの、いろいろの面の幾分か知られると思うからだった。この民衆の中で、民衆とともに立上る日を望むわれわれであるからだ。

巧妙な権力者や権力主義者の指呼におどって無実の弱小民族の血を流すばかりか、ある理性的な者が一人の朝鮮人をかくまっただけというので、その家を襲撃している。組織権力の命令には「服従の美德」を教え込まれている警官や軍人も民衆の一人に相違ない。官庁や会社階層組織に忠誠をつくす人々も民衆にちがいない。信じやすく欺されやすいこの民衆の中で、この民衆とともに社会をつくっているものがわれわれだ。

権力主義者はこの愚鈍な民衆を放任していたら、どんなことになるか分らないという。毛沢東も百花齊放、百花齊放と言論の自由を認めて手を焼いた経験者だ。そして自分の弱化した地位を回復するために中学生や高校生

いる。レーニンの手口だ。シナでもロシアでも民衆は口を閉して政治を語らない。日本の政府が大震災の時に恐れられたのは民衆の蜂起だった。権力を目指す革命家は民衆の秘められた不満を利用しようとする。権力の座にすわった時に彼が実行するのは、少しばかりの社会福祉政策と、警察や軍隊の増強である。社会福祉だったら軍隊や警察を増強しなくとも、スエーデンのように改良政策によって、血の革命を経ずに、立派にやれるのである。経済革命にしてもケインズが言うように、暴力革命を考えないマルクスは頭が悪いと言える。近代経済の政策によって労働者階級におこぼれ程度の利益の分け前を与えることで、労働者を極度に貧困化させずに、革命的意欲を鈍らせることができるのは、日本の労働組合が御用組合化している事実でも分るではないか。政治の要諦は、いつでも目先を変えた政策で民衆をゴマかすことにある。議院主義に転じた共産党が、そして社会党が票を得るためにどんなことを言っているか。選挙は一種の賭博ではないか。三当一落と言ひ、地盤と言ひ。金とコネで当然することが民衆を代表するということか。イギリスの労働党と保守党の政策にはほとんど差がないと言われる。労働党が政権をとっても、やれることは改良的手段以外にはない。こんなことのために、何故軍隊や警察や原爆が必要なのだろうか

民衆が本当に望んでいることは、はたしてこんなことなのだろうか。民衆は常に権力者、権力主義者共の愚民政策による教育で自己を見失ない、ブルジョア共の営利の用具になっている。何か起っても四離滅裂な行動をする。何を求めねばならないかさえも見当がつかない。これに民衆の汚辱の姿だ。こうした中でわれわれは民衆と共に生き、共に考えようとしている。そのわれわれは微力で、社会の片隅でやっと生きているに過ぎない。だがわれわれは絶えず、民衆に問いかけ、語りかける。「人間とは、民衆とは一体何なのか」と。

中浜が「杉よ、眼の男よ」と、うたったように、アナルシムの真実を語る者の声に答える者が無いと言えらるだろうか。大杉は社会的個人主義の序文の中で、「僕が一生の事業とするこの学説の研究と伝道との、真しなそして熱心な精神から」その諸論文を書いたと述べている。彼の一生は未完成だった。彼でなくても石川三四郎も、クロボトキンも、バクーニンも皆未完成だった。アナルシズム自体が未完成なのだ。そして人間自体が、世界自体が未完成なのだ。完成は破滅かも知れない。しかしわれわれは生きていく限り、せめてほんの一步でも前進したいのだ。

アナルシズムの哲学は、異様に光る民衆の眼の奥の魂である。

会からのお知らせ

○九月始め頃にティーチンをやる予定でしたが、どうにも都合がつかまませんので当分延期とします。

○九月十六日(土)夜六時から東京駅国鉄労働会館で

(八重州口)

大杉栄の記念会が開かれます。50年なので他にも色

々の計画があると思います。競合でなくそれぞれに

有意義であることを祈るものです。(会費50円)

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和47年8月15日発行 Vo. Ⅱ No. 9

編集兼発行者 三浦精一

発行者 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)

リベルテールは全国の同志の機関誌、自由・平等・友愛を原則としてアナルシーを目指すリベルテールに言論の場を提供するものです。会則もなく入会や退会の手続もありません。組織を持たず、同志たちの自発的な献身的な協力によって、便宜上東京で発行されています。発行にはもちろん事務処理の時間や労力だけでなく、相当費用もかかります。そのため一応誌代をいただくことにしています。コーヒー一杯の値段よりも安い100円ですが、読者が増加すればさらにページ数を増加して内容を充実させることもできます。そのために同志諸君にお願いしたいのは読者の増加に御協力下さることです。御投稿と共に是非このことをお願いいたします。(1部送料共100円・1年分1,000円)振替用紙を同送しましたのは督促の意味ではありません。誌代は自発的に適当な時にお送り下さい。

発行所 〒177 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

編集部 〒276 千葉県八千代市八千代台北7-4-60

三浦精一方

リベルテールの会

通 信 欄

この欄は、加入者あての通信にお使い下さい。